

Title	「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば：その1 ニューヨークの楊蔭楡
Sub Title	Overseas-educated Chinese women in early 20th century and their discourse part I : Yang Ymyu in New York
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.2 (2009.) ,p.193(40)- 232(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20090331-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば

——その1 ニューヨークの楊蔭楡

櫻庭ゆみ子

はじまり

ここに一枚の写真がある。1919年8月、アメリカ東部ニューヨーク州トロイで開催された第15回東部中国留学生大会での集合写真⁽¹⁾。その前列二列目、向かって左から5人目、ちょうどショートカットの中国人女性とアメリカ人の女性の間にすわり中国式両合わせの上着を着て、真ん中わけて髪をきっちりまとめている女性、ここに彼女がいた。

三叔母は浅黒い肌をしていた。二重瞼で、瞳はきらきらと輝き、笑うと両端の口元に細いえくぼができたし、歯並びもきれいだった。形の良い顔をしており、背丈も平均よりやや高く、纏足をほどいた足だったが、ふさわしい靴を履けば纏足の女性には見えなかった。私は以前、叔母がピアス用の穴をあけていたのに気付いていた。でも耳たぶの穴はとっく



集合写真（一部）。楊蔭楡（第2列左から5人目）と徐志摩（第3列右から2人目）

にふさがっていたし、ついでイヤリングをしているのを見たことはない。」(楊絳『叔母の思い出』⁽²⁾より)

彼女とは、名エッセイストである姪の楊絳(1912-)が「叔母の思い出」で語った人物、1925年の「女師大事件」⁽³⁾でその保守性を魯迅から攻撃され、以後歴史の表舞台から消えてしまった楊蔭榆である。

楊蔭榆は中国において、女性で初めて国立大学学校長になった人物として知られ、その経歴については、たとえば北京女子高等師範大学に関する最近の研究⁽⁴⁾で次のように紹介されている。

楊蔭榆、1884年生まれ、1902年実兄の創立した錫金公学にて近代数理知識を学び、その後蘇州景海女中で2年、それから上海務本女学堂で学びここを卒業する。1907年、江寧学務公所の試験に合格して官費留学生として日本に派遣され、青山女子学院で学び、のちに東京女子高等師範学校理科博物科で学ぶ。1923年江蘇省立第二女子師範学校の教務主任に招聘され、1914年、北京女子師範学校学監および数理教員に任ぜられ、1918年、教育部第一回教授クラス欧米派遣留学の際、米国留学に応募して選ばれ、コロンビア大学にて教育学を専攻する。1923年、教育修士号を得たのち帰国。1924年2月、許寿裳より引き継いで女高師学長となり、翌年、女高師から昇格した国立北京女子師範大学の学長に就任する。

堂々たる経歴の持ち主だった。しかし、彼女はその後「女師大事件」をきっかけに校長の職を辞すことになる。そして、故郷蘇州に戻り引き続き教育畑で働くが、蘇州侵略がはじまった当初、日本兵に蹂躪される地元の女性たちをかばいそれを根にもった日本兵に虐殺される⁽⁵⁾。楊絳が「ねじまがった人生」と称したように数奇な運命をたどった女性である。

従来の共産党の路線に沿った中国現代文学史では、楊蔭榆は魯迅と敵対した保守派の旧勢力を象徴する人物として取り上げられてきたが、その後、日本軍への抗議を身をもって行った国民的英雄という角度から再評価されるようになった。思想的には保守的傾向を帯びてはいるが国難に殉じた愛国的教育者、というのが現在彼女に下されている一般的な評価である。

今から十数年前に筆者は楊絳のこの回想録を訳し、また中国女子教育史上における楊蔭榆の役割について小論⁽⁶⁾で紹介したことがあった。その後も

「幸福な結婚をしていたならば良妻賢母になっていたかもしれない」、それなりに資質を備えたこの女性の、楊絳いわく「傷ついた魂」をもつにいたる半生が折にふれ気になった。

彼女は、不幸な結婚のしがらみを自ら断ちきり、「女子学生」という存在すら稀少だった20世紀初頭の中国で、当時としては進歩的な学校に通い、日本留学に選ばれ、そして、東京女子高等師範（お茶の水女子大学の前身）を優秀な成績で終了した後アメリカ留学に向かい、と、積極的に異文化接触に努め外へと目を向けた知識人だった。また彼女は、ルソー『民約論』などを日本語からの重訳で中国に紹介した楊蔭杭（楊蔭榆の実兄）から「日本語の専門教育を受けている」と評される日本語能力と、一定レベルの英語能力を備えていた今でいう「複眼的思考」をできる状況にあった。それが「近代化」を模索していた中国で受け入れられず、本来ならば協調関係にあるべき進歩的な学生たちと対立し、絶えず周囲と大小の摩擦を起こすに至る。この不幸を、楊絳は「外国で長らく学業に専念していたために中国国内の革命の潮流に気づかず、時勢を理解できず、自分の立場を見極めることができなかった」と的確に判断している。以前拙稿で彼女を取り上げた時も、ほぼこの線に沿って紹介した。

ただそれでも、なぜ楊蔭榆が挫折し、歴史の表舞台から消えてしまったかについて釈然としない思いが残っていた。「歴史上の小人物」であるこの女性の挫折の在り方には、「近代化」にともなって複雑に入り組む日本、中国、アメリカのねじれた関係が体現されていると言えるが、問題は、そこに「名誉回復」という政治的視点から見たのでは見えてこない視点——つまり言葉の問題——が抜け落ちてはいないかということである。

例えば、清末民初にいち早く教育改革を行い近代的エリートを輩出した江蘇省を出身地とし、まず日本に留学しそれからアメリカに行って研鑽を積んだ女性は他にもいる。民国初期、女性の意識改革に貢献した『婦女雜誌』⁽⁷⁾の初期の編集を務めた胡彬夏（1888-1931）⁽⁸⁾、北京初の女性による病院を開いた女医として、また言語学者の趙元任（1892-1982）と非伝統的な「革命的」結婚を行ったことで話題となった楊步偉（1889-1981）等、ここ数年、中国女性史を見直す立場から取り上げられる中国人女性は数を増してきている。しかし、楊蔭榆は依然として姿を現さない。

なぜ彼女は「不在」のままなのか、それは思想に時代を先駆けた新しいものが見られないという評価が下されたからというより、女性史、あるいは

文学の立場から必要となる「肉声」が見えないことからきているのではないか。もちろん、楊蔭楡には、「女師大事件」に関連して『晨报』など公のメディアに発表された掲示、釈明文、宣言文など、その「ことば」は多数ある。これについては筆者の先の論文でやや詳しく論じた。ただそこでの中国語は、公式的見解を表現するときのルールに則って書かれた「ことば」であり、実際に彼女の内部で起きた葛藤、あるいは自己の内面の思想、感情をより明らかに表出するような「ことば」は今一つ見えない。

彼女より4年ほど早くアメリカに留学した陳衡哲（1890-1976）と比較すると違いがはっきりする。のちに、中国女性としてはじめて北京大学に教授として迎えらるることになる陳は、現代白話文での小説「一日」⁽⁹⁾を習作として手掛け、以降英語を仲立ちとして、よりこなれた自身の言葉を練り上げてゆくと同時に、アカデミズムという従来女性が入れなかったことばの領域でも臆することなく発言し、つまり自己の思想を表現する書き言葉を身につけ、言語実践をしてゆく。女医であった楊步偉の場合は、言語学者であり「国語」の推進者であった夫、趙元任の助けを借りて生き生きとした語り口の自伝⁽¹⁰⁾を書いた。また先に挙げた胡彬夏は、楊蔭楡と同郷の無錫出身であり、楊と同じく清朝による最初の女子官費留学生としてアメリカに留学し、楊がアメリカに行く際には留学先の学長に楊を推薦もしているのだが、その決して長くはない生涯に数多くの論説・論文を発表し、思想、思いを伝える彼女の「ことば」を残している⁽¹¹⁾。

当時文盲状態におかれていた農民ならいざ知らず、国を代表するエリートとして、またことばがかなめとなる教育分野で改革の旗手となることを要請された楊蔭楡に「自らのことば」が見られないのは奇妙である。楊蔭楡が国外に出た時代がちょうど清末から民初にかけての「国語」の黎明期であったことを考えた時、彼女の「挫折した人生」には、当時の「口語化」をめぐる言語改革の動きと関連する何かがあったのではないかと、との問いがたてられないだろうか。彼女の「ことば」の不在は、逆に「ことば」をめぐる問題を提示するものではないかということである。この疑問を解くにはまず「国語」の黎明期に位置した中国知識人の女性のことばの実態がどのようなものだったのかをみてゆく必要がある。

今回の考察の目的は、新たに見つかった楊蔭楡の英文の手紙⁽¹²⁾から、歴史の表舞台から消えてしまった彼女の、4年間の短いアメリカ滞在中にかすかに残した痕跡をたどり、そこで引っかかってきた問題を指摘してみること

である。楊蔭榆という「不在」の存在を見ながら、音声言語、文字言語の両面が大きく変化しようとしていた中国「近代」の言葉の動きを探る手掛かりにつながる問題提起を行う。そして、今後「国語」の黎明期に位置し異文化に触れた経験を持つ、例えば陳衡哲、林徽因、凌淑華、楊絳等「彼女たち」が、漢字とアルファベット及び「国語」の間でどう表現手段を模索し、自分の「言葉」を構築するためにどのような葛藤を経たかをさぐる足がかりとする。いわば「彼女たち」のことばの系譜たどりの最初の一步をはじめてみることである。

一

1918年の夏、楊蔭榆は、学監および数学の教員として四年間務めた北京女子高等師範学校を離れ、アメリカに向かう客船、南京号が停泊する上海へ向けて北京駅から列車に乗りこんだ。当日は、中華民国教育部による第1回教授職海外派遣留学という栄えある任務を負った彼女の旅立ちを見送りに、教え子を始め同僚、親戚一同が北京駅に詰めかけていた。当時その場に居合わせた姪である楊絳の幼い目に映った叔母の姿をもう一度紹介しておこう。

当日姉について駅に行くと、多くの学生が叔母を見送りに来ていた。その中には私の先生もいた。教師の一人と見知らぬ学生数人が嗚咽を漏らしていたのには驚いてしまった。叔母も汽車の最後尾についた小さなバルコニーのようなところに立って涙をぬぐってばかりいた。駅のホームでは、数人が大きな声で泣いていたし、ほかにも、多くのものが涙を拭いていた⁽¹³⁾。

こうして人々から名残を惜しまれつつ、国家発展のための女子教育に貢献すべく使命感に燃えた彼女は、8月14日、上海浦江から南京号へ乗り込み⁽¹⁴⁾、横浜、ハワイを経由してサンフランシスコへと向かう三週間にわたる太平洋横断の旅へと旅立った。

彼女とともにアメリカに向かったのは、同じく教育部派遣の女師大の同僚、沈葆徳のほか、北京大の劉復、朱家華、北京師範大の鄧萃英などの教授たちをはじめ、清華学校を卒業し留学の権利を手にした学生60人余りとそのほかに義和団賠償金奨学金を獲得した学生たち、そして私費留学生たちの総

勢150名あまりの大規模な集団で——この中にはのちに新月社を起こしブルームズベリー派グループおよびその他同時代の欧州の文学の紹介で活躍する詩人、徐志摩もいた⁽¹⁵⁾。

アメリカへの官費留学生派遣は、1847年にエール大学に留学した容闈が清国朝廷に申請して始まった幼童派遣（1872-1912）を嚆矢とし、その後義和団賠償金による奨学生として民国政府による派遣が1909年から始まる。これは清華学校が改組され国立清華大学となる1929年まで続けられ、その間派遣された留学生の数は1300名あまりに上る。初期の留学生には、たとえば後に清華大学学長となる梅貽琦（1909年）あるいは、胡適、趙元任（1910年）、王庚（1911年）等、1914年に始まった女子学生派遣では、陳衡哲らがおり、彼（女）らが帰国後に教育、文学、外交とさまざまな分野で中国の近代化に関与してゆくことになる⁽¹⁶⁾。

この間、周知のように中国では、1911年10月10日の武昌武装蜂起をきっかけとして起こった辛亥革命により清朝が滅亡し、南京に中華民国臨時政府が成立、1913年、孫文に代わって大総統に就任した袁世凱の独裁と、さらに1915年に21カ条条約の受け入れに対する抗議運動がおり、条約廃棄を求める抗日運動が高まる中⁽¹⁷⁾、袁は内外の支持を失って1916年に病死する。袁世凱の反動的な政策を嫌ってドイツへ留学していた蔡元培が、教育総長の要請を受けて帰国し、翌年、1917年に北京大学学長に就任、以降、学部の再編成を行い、教授陣を入れ替え、たとえば当時の学生や知識人に近代思想の窓口として広く読まれた雑誌『新青年』の主編であった陳独秀を文科の新学部長として招くなど、それまでの停滞した学風の一変を図る大胆な教育改革に着手する。1917年の教授派遣も蔡の改革の一つの試みであり、国の代表たる者たちへの期待を反映して、諸費用の使い方から、衣服への注意、集合の仕方など出発にあたっての細かい配慮——それは同時に政府側の監視でもあった——がなされていた⁽¹⁸⁾。

こうした新たな教育改革の動きを受け、自国の半植民地化の危機を前に近代化の急務を担った留学生たちが、それぞれが祖国のために国家建設の先兵たらんとする自負に満ちていたことは想像に難くない。当時22歳であった若き徐志摩は、太平洋上の船上で「ポーランドや朝鮮のようになりかねない今日、救国の責任は我ら青年の肩にかかっているのだ」⁽¹⁹⁾と、高揚した精神を手紙につづっている。そして徐志摩が留学中に記した日記には、この船上で徐志摩の友人と「意気投合して語る」楊蔭榆の様子が描かれている⁽²⁰⁾。一

行には楊蔭楡も含めて20名の女性が含まれていたが、国家建設に報いようという熱い思いは彼女たちも共有していただろう。これまでになく大規模な1918年の派遣組の3週間にわたる船旅は、互いに議論をぶつけあう活気に満ちたものだったことが想像される。

一行は、ハワイを経由したのち9月4日にサンフランシスコに到着、ここで待ち受けていた西部留学生大会代表の盛大な歓迎を受け⁽²¹⁾たのち、大陸横断鉄道に乗り込み東海岸へと向かう。楊蔭楡の目的地は、東海岸マサチューセッツ州、彼女より10年前に渡米した胡彬夏がまずは落ち着いたウォルナツヒル・スクールである。

ウォルナツヒル・スクール⁽²²⁾は、1893年にウェルズレイ・カレッジの卒業生フローレンス・ビッグロウとシャーロット・コナントによってボストン郊外に設立された若い女性のための寄宿学校で、胡彬夏をはじめ、20世紀初頭に、中国人の女子留学生を何人か受け入れている。現在はジュリアード音楽院にも卒業生を送り込む芸術学校として有名な高校であるが、当時は創設者ミス・ビッグロウ校長の下で、従来の宗教色の濃い「家庭で役立つ女性の教養プログラム」から一歩先に行くよりアカデミックなカリキュラムが施行され、学生たちは政治的、社会的な動きにも目配りするよう配慮されていたようである。近代的な社会で役立つ専門教育機関への過渡期の学校だったといえる。楊蔭楡も、胡彬夏と同じく、ニューヨーク州の美しい自然の中に建てられた風情ある建物のなかで英語の訓練を受けながら、10年まえに日本で受けた「良妻賢母」式教育とは違った女性の在り方に感銘を受けるところが大きかったのではないか。

さて20世紀初頭のアメリカは、急速に工業化と都市化が進み、またそれに伴って生じた経済的社会的問題に対処するために、民主党大統領ウッドロウ・ウィルソンのもとで様々な改革が行われていた。いわゆる「革新主義の時代」⁽²³⁾とよばれる時代が第一次世界大戦参戦の1917年まで続き、そして終戦をはさむウィルソン任期の最終年、1919年のポスト世界大戦の陰鬱な年を経て、『オンリー・イエスタデイ』が活写する「アメリカ個人主義が思いのままに伸張した」⁽²⁴⁾時代への突入となる。楊蔭楡が身を置くことになる1918年から1921年にかけては、ヴィクトリア朝の禁欲的な価値観・道徳観を残す農村的な生活様式から、自動車、ラジオが普及し、男女の服装、風俗にも大きな変化が現れ、スピードと快楽を求めるより解放された都会的な生活様式へと移行する時期であった。様々な価値観の変化は、中国人留学生の間にも

影響を与え、愛国主義に裏打ちされ、帰国後の国家建設に貢献するのみではない価値観、生活態度が生じていくことになる⁽²⁵⁾。また「革新主義」時代は、「公権力の活用による経済秩序の維持が試みられた時代」であり、一方で有権者の拡大、他方ではテクノクラートの行政面での役割の増大が要請され、企業や政府における彼らの役割が増大するにつれ、彼らを養成する大学の役割も強まり、教育内容も、従来の古典重視の教養主義から、近代社会に合致した専門家養成の教育機関へと変容しつつあった。この時期には女性の社会進出も大いに進展する。近代的な進んだ教育システムを研究することを目指して派遣された楊蔭榆らが模範とするアメリカの高等教育機関そのものが、実は大きく変化を遂げようとする状況にあったといえる。特に「パラドックスとジレンマの時代とも位置づけられる」⁽²⁶⁾女子教育に関しては、中国人女子学生を受け入れたそれぞれの大学の事情に注意する必要がある。それは、今後陳衡哲を論じる際においおい見てゆくことにして、まずは楊蔭榆の後を追うことにしよう。

二

さて目的地アメリカ東部に到着した彼女は、まず同行した親戚の女子学生、楊保康の知り合いで、ウォルナツヒル・スクールに籍を置いた学生から、校長のミス・ビッグロウに電話をかけてもらい関係を取り持ってもらう。そして、ミス・ビッグロウが信頼している胡彬夏の紹介状を携えてウォルナツヒル・スクールの位置するマサチューセッツ州、ボストン近郊のナティックへと向かった。

出迎えたミス・ビッグロウ校長の楊への印象は良好で、次のように好意的な評価が下されている。

……ミセス Chu（胡彬夏のこと——筆者⁽²⁷⁾）はミス・ヤンについて、彼女が人格的にも学識も立派であると熱意あふれる調子で推薦していますので、私どもはもし可能であるならば彼女を受け入れたいと思いました。彼女（ミス・ヤン）がミス・ユエン⁽²⁸⁾の友人でありかつ親戚であるという事実は、強力な推薦です。このことに加えて、ミス・ヤンは有能で素晴らしい女性だという印象を私どもに与えました。それゆえ、私どもは、彼女が望むように、ここで私どもと一緒に食事ができると同時に、課外

での時間もできるだけ多く過ごすことができるように、学校の近くに彼女のために部屋を用意いたしました。ミス・ヤンは当初はどのクラスを取るべきか決めておりませんでした。彼女はまず最初に多くの授業を見てみたいと申ししておりました。彼女は数学を教えておりましたので、代数と幾何の授業を参観し、また、一番適したクラスを見つけるために、多くの異なる英語の授業を参観しました。聖書とフランス語の勉強を直ちに始めております。彼女は教授法を視察するために通常授業時間を学校と教室で過ごし、そして自分の授業以外の時間は勉強に充てています。

これは、駐米中国教育部部長からミス・ビッグロウに宛てて、楊蔭楡の到着の有無を問い合わせる1918年10月30日付の手紙⁽²⁹⁾に答えた手紙である。彼女はやはり政府派遣の教授という特殊な身分であり、そのため保護と管理が一般学生より厳しかったことがわかる。

ところで、中国人女子学生の米国留学は、1881年にアメリカにわたり1885年に中国人女性として初めて米国高等教育機関で学位をとり医者となる金韻美（または金雅美）をはじめとして、同じく牧師の娘であった許金菊、そして梁啓超らがその功績を称えたことによって知られる石美玉と康愛徳と、1880年代にすでに4人の女性が専門的な教育をアメリカで受けていたことが知られている⁽³⁰⁾。彼女たちは親が牧師かキリスト教信者か、あるいは康愛特のように宣教師に養育されたことから、その医学のキャリアは人類の救済を目指す伝道の問題とともであり、その意味で、辛亥革命以降、国の建設の任務を担った次の世代の女性たちとは、価値観、最終目的において留学の性質を異にしている。ただし彼女たちの後に続く中国人女性が近代的な医学を選択可能な専門分野とするのに大きな役割を果たしたことは注意しておく必要がある。思想的には、彼女たちは、日本に留学した秋瑾らがアナキズムへの共感を示し政治的にも活発に活動したのとは異なり、清末から民国初期にかけて中国社会が要求した「女性」の役割を逸脱しない中での改革を唱える穏健派だったといえる。

中国における近代的な女子教育が制度として整えられる指標となる年は、清朝が「女子師範学堂章呈」第39条及び「女子小学章呈」第26条を公布した1907年で⁽³¹⁾、これ以降、教育救国の使命を帯びた女子学生が国外に送り出されることになる。官費女子留学の始まりは江蘇省が行った留学試験に合格した5人の女性、胡彬夏、宋慶林、王季蘭、王季明、そして楊蔭楡が外国留

学（胡彬夏らがアメリカへ、王季明と楊蔭楡が日本へ）派遣されたのが始まりであるとされる。その後、先に述べたように、1914年より義和団事件賠償金官費留学制度が女性にも適用され、第1期生として陳衡哲ら10名の女子学生がアメリカに行くことになる。彼女たちは、国家建設のための近代的「良妻賢母」のイデオロギーが、時代と地域で変容してゆくその変化を身をもって体験する世代であり、陳衡哲も楊蔭楡も新旧のはざまで様々な矛盾の余波をまともに受けることになる。このあとに1919年の五四運動の洗礼を受け「新しい女性像」を掲げた女子学生達が続く。この「彼女たち」は、「良妻賢母」の枠組みを脱して、まずは個としての自己を確立することを目指した⁽³²⁾。いわばジェンダーの枠組みを超えようとする趨勢に身を置き、また労働階層への視座を否が応でも持たざるを得ない時代の中でその視野を、エリート層から一般大衆へと野を広げてゆく世代である。複雑な社会の動きの中で様々に揺れ動いたこういった「彼女たち」の在り方にはより注意深い腑分けと検討が必要であるが、中国女性史研究の分野で研究が蓄積されつつある領域でもあり、紙面に限りもあるので今回はその流れを追うことはしない⁽³³⁾。

さて、「女師大事件」では魯迅らから「国民の母の母」の養成に心血を注いでいると揶揄された楊蔭楡は「良妻賢母主義」のイデオロギーが国民国家の成立に必要な秩序だてと連動していることに無自覚であったとはいえるが、彼女自身が女性の場所を主に家庭内にとどめておく視座にとどまっていたとは言い難い。不幸な結婚の経験から自らが「良妻賢母」の役割を担うことは選択外だっただろう。まずは自立して社会での地位を確立することが女性にとって必要なことであり、そのための生きる技をおしえる教育が何よりも重要なのであると切実に感じていたに違いない。彼女は、選ばれてアメリカに來たという自負とともに教育に身を捧げる決意でまっしぐらに異文化に突入していく。早く英語を操れるようになり、世のため女性のためそしてお国のために多くの進んだ知識と理論と教育のテクニックを身につけようと、一方でミス・ビッグロウにティーチャーズ・カレッジへの橋渡しを頼み、一方で見聞を広めるべくあちこち視察に出かける。

ミス・ビッグロウもできる限り力になろうと、クリスマスイヴにもかかわらずティーチャーズ・カレッジに次のような手紙⁽³⁴⁾を書き、彼女に有利に働くよう紹介している。

私どもウォルナツヒルの今年の学生の中で、ミス・ヤンという一人の興味深い中国女性があります。彼女は、教育法を研究するために我が国に送り込まれました。彼女は秋学期をウォルナツヒルですごし、アメリカでの生活に慣れながら英語の高度な運用能力を身につけている最中です。彼女は、英語の運用能力がつき次第、ニューヨークにいきティーチャーズ・カレッジで教育学を学びたいと願っております。

つきましては、ティーチャーズ・カレッジの外国人学生入学許可の条件をお尋ねします。中間試験が終わっていても彼女は入学できますか。このような許可を得るためにはどういった申請の形式が必要でしょうか。

ミス・ヤンは（アカデミックな）訓練を受けている成熟した女性です。10年まえに中国で留学の奨学金を取るための激しい競争の試験を受けました。第3位までの女性がこの国に勉学のためにおくりこまれました。私どもは彼女たちを三人とも存じており、そのうちの二人は、ウェルズレイ・カレッジ——後に卒業——で学ぶために私どもの学校で準備をいたしました。そのうちの一人は、シカゴ大学の博士号の試験を優秀な成績で通ったところです。彼女たちは、いずれも人格及び能力において優秀であり、人柄も大変魅力的です。

ミス・ヤンは第4番目の成績だったので日本に送られました。3年間学んだあと中国に戻り、その後4年間、中国唯一の国立の女子師範学校の学監を務めておりました。この師範学校は北京にあります。

（中国）政府は女子教育のための最良の方法をこの国で研究するために彼女を送ってきました。私どもは、彼女がとても快活で興味深い人物であり、入学に必要な専門知識の要求をどの程度満足させることができるのかについてはわかりませんが、ティーチャーズ・カレッジのコースに適應する能力があると信じております。彼女がどんな資格証明を提出すべきなのかをぜひ知りたく存じます。できるだけ早いお答えをいただきたくお願い申し上げます。

ここでいう三人の女子学生とは、1907年に最初の女子官費留学生としてアメリカに送り込まれた、胡彬夏⁽³⁵⁾、宋慶林、王季蘭のことである。

この手紙に対し、年明けの1919年1月3日にコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ秘書掛アプトン氏より、楊蔭楡のティーチャーズ・カレッジ入学は可能であること、どの学位のコースがふさわしいかを知るために、楊蔭

楡の高校と大学の成績送付を依頼する返事が届く。

ところが、クリスマス休暇明けを待てなかったらしいせっかちな楊蔭楡は、待つ時間を無駄にできないとしたのか師範学校への入学を打診しにボストンに出かけてしまう。そして、3ヶ月半が経た4月19日に、フレミングハムの師範学校に身を落ち着けた⁽³⁶⁾楊蔭楡はミス・ビッグロウからの手紙（記録には残っていない）への返事⁽³⁷⁾をこうしたためている。

親愛なるミス・ビッグロウ

貴女がフロリダから送ってくださった親切なお手紙と美しいカードを受け取ってとてもうれしいです。先週の日曜日、Helen Hood から素敵な手紙が届きましたが、そこに貴女が再び学校に戻ったこと、それから「ヨーロッパとその必要性」についての講演にとっても感銘を受け、他の国を、彼女にできる方法で助けたいと感じたことが書いてありました。確かにいい講演というものは素晴らしいものです。私もその場において聞くことができたらどんなに良かったことだろうと思います。

昨日はウェルズレイに行き、ミス・ミリガンとミス・フォックスクラフトにお会いしました⁽³⁸⁾。彼女たちにお会いできてとてもうれしかったです。もちろんミス・フォックスクラフトのことはあまり知りませんが、ミス・ミリガンはとても親切で性格のよい女性だと思います。そうではありませんか？

来週はイースターの休暇です。私はボストンの師範学校を参観に行こうと思っています。ボストンの師範学校はアメリカで最高の師範学校だと聞いていますですからぜひとも見に行かなければならないと思います。師範学校についてもっとわかると思います。

ところで私はここアメリカの人々が師範学校を「職業学校」を呼ぶのにいい気持がしません。市民の教育に対する責任を負う人間は、とても素晴らしい仕事（をしているの）だと思います。教師の目的は日々の糧を稼ぐことだけにあるわけではありません。教師養成学校は、他の職業学校とは違ったものに違いないと思いますが、貴女はどうお考えになりますか。

敬具

Yinyu Yang

フレミングハムの師範学校 (Normal school)⁽³⁹⁾は、アメリカで最初の女性教師養成学校として設立され、視覚障害者及び聾啞者教育の先駆者であるメアリー・スウィフト・ラムソン、黒人女性としてはじめて高等教育機関に入学しその後も黒人女性の教育に貢献したメアリー・M・マイルズ、また奴隷廃止運動の主導的役割を演じたメアリー・マイルズ・ビブ等社会で活躍する女性を多く生み出す母体となった。手紙からはジェンダーの壁を超え、家庭の枠から外に出て社会で活躍しようとするアメリカの女性たちにまじって、楊蔭楡が大いに刺激を受け生き生きと視察してる様子がかがわれる。家事のプロ養成から社会に役立つより専門的な知識の獲得とトレーニングへとカリキュラムがシフトしていた東部の師範学校の雰囲気は、女性の自立を目指す彼女にとって身を置くのうってつけの場所だっただろう。ミス・ビグロウに英語能力が十分でないことのもどかしさを訴えながらも、女性の社会進出のために活動するアメリカ女性と積極的に交流する楊蔭楡の姿が見える。

この間楊蔭楡の状況をめぐって教育部が放任していたわけではない。保護と監視の目は行き届いている。彼女の成績と今後の進路をめぐってミス・ビグロウと教育部の間で書簡が取り交わされている。

まずミス・ビグロウが、教育部 U. Y. Yin のウォルナツヒル・スクールでの成績を問う 4 月 16 日付の手紙 (記録になし) に対して 4 月 22 日付の返答で、楊が秋学期だけの在籍だったためにクリスマス以降の成績表はないこと、楊がすでにクリスマス休暇で 12 月 18 日にウォルナツヒルを発ったこと。彼女がフラミンガムのマサチューセッツ州立女子師範学校に今年一杯研究に行くことに決めたこと。この学校は素晴らしいこと。既に向こうの校長、Rev. James. Chalmers に楊が希望のクラスに入ることと、他の授業の参観に便宜を図ってくれるように頼んだこと、秋学期の成績を同封したことを知らせるとともに、最新の学校案内を同封したことなどを告げている⁽⁴⁰⁾。こういった背後の動きを知っていたかどうかは定かではないが、フレミングハムでの学期を終えようとするなかで、それなりに自信を得た彼女は、いよいよ本命のコロンビア大ティーチャーズ・カレッジへの入学を目指して夏休みの準備に取り掛かる。5 月 18 日付の手紙で、今後の計画を細かにミス・ビグロウに告げている。

親愛なるミス・ビグロウ

お招きのカード、どうもありがとうございます。当日はお伺いしたか

ったのですが、日中は所用でボストンに行っていました。ボストンから戻ったらお伺いしに行けると思っていました。通りを歩いている途中で雨が降り始め、びしょぬれになってしまいました。そういうわけで行かれませんでした。

夏休みが近付きつつあります。なんと時間の経つのが速いのでしょうか。以前お話ししたように、わたしはコロンビアで夏期コースを取ろうと思っていました。けれどもウェルズレイの中国人女子学生たちはコーネルに行こうとしています。彼女たちは一軒家を借りて自炊するつもりであり、一緒に来ないかと私を誘いました。もしコーネルの教育学の授業がコロンビアと同じように良いのならば、行くのは素晴らしいことではないかと思えます。どう思われますか？

わたしは、シルバーベイの夏の学会に参加しようと思っています。会議は夏期講習が始まる前に開催されますが、でもとても長い旅になると思えます。ウェルズレイの女の子たちは参加しません。おそらく私一人で行くことになると思います。

今私は新たに約100語の単語を習いました。以前に書くことができた以上にうまく書けるようになったとは思えませんが。

敬具

Yinyu Yang

さて1919年の夏を彼女は、いったいどのように過ごしたのだろうか。手紙と資料を突き合わせて推測するに、6月中旬の夏休みが始まった後、手紙にあるようにまず、「シルバーベイの学会」に参加し、それからコーネル大学のあるイサカへと東へ逆戻りし、そこでウェルズレイの若い女子学生たちと一緒にコーネル大夏期コースに出席し、そして、9月中旬に開催されたトロイでの東部学生大会⁽⁴¹⁾に出席した後、マンハッタンのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジへと向かったということか。順序が前後したとしても、移動距離をみるとずいぶん広範囲に動き回っている。直線距離にして、フレミングハムから北西に向けて風光明媚な観光地シルバーベイまではおよそ240キロ、シルバーベイからイサカまでは200キロ弱、イサカからトロイまで300キロ弱、トロイからコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのあるマンハッタンまで100キロ弱ある。19世紀初頭から内陸交通が飛躍的に発展しすでにこの時代にはアメリカ全土にわたってかなり密な鉄道網が広がってい

た⁽⁴²⁾ことを考えれば決して無理な移動ではないが、彼女が「解放脚」（纏足をほどいた足）であり、それだけ移動にかかる負担が大きいことを考えると、彼女の強い好奇心、知識欲、行動力の背後に自らの身体に対する劣等感とそれを強いた旧体制に対する怒り、そしてそれを打破する新しい教育への期待があったというのは言い過ぎだろうか⁽⁴³⁾。女性教育者のトップを走る者として、女子学生たちのリーダーたることの強い自覚については、夏のイサカ学生大会⁽⁴⁴⁾に同じく出席していた徐志摩が、愛国心には共感を示しつつも、その指導者然とした態度に辟易しながら、国家の危機に面してダンスにうつつを抜かすとは何事かと学生たちを叱咤する演説をぶったという彼女の様子を擲掄って日記に残している⁽⁴⁵⁾。

徐志摩はこの夏クラーク大学で学士号を取ってコロンビア大学の修士課程に入り、マンハッタン北部、ウエスト120丁目にある男子学生宿舎に居を定める。楊蔭榆のほうも、念願のティーチャーズ・カレッジに首尾よく移り⁽⁴⁶⁾、本格的に専門分野——教育学の研究のために精力的に活動を始める。

ティーチャーズ・カレッジ⁽⁴⁷⁾は、19世紀末、もともとニューヨーク地区の貧しい移民の少女たちの家事訓練学校として慈善家のグレイス・ホードレイ・ドッジによってはじめられた職業訓練校を前身とする。その後、少年をも含めた貧しい子供たちの教育に当たる専門の教育者養成の学校へと発展し、1894年に現在の場所であるウエスト120丁目に移転、現在はちょうどコロンビア大学の北門と120丁目を隔てて向き合う形で、その象徴的建物であるネオゴシック建築のラッセルホールの格調高い正門がそびえているが、1920年当時はアムステルダム街から一つ西のブロードウェイに向けてから女子学生寮だったウィザーホールとその横のハウスホールド & アーツビルディング（のちのグレイス・ドッジホール）前方、メインホールとの間は空き地だった。1898年、経営と管理組織は独立したままでコロンビア大学の付属の教育機関として、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジと改称し、よりアカデミックな教育の専門家を養成する高等教育機関と発展してゆく。アメリカの初等・中等教育の教員不足を補っていた女性教員の養成という性格を持っていたために、当初から過半数の学生が女性であり、都市化に伴う産業構造の変化に伴い、自活を求める女性の急激な増加を反映して、設立当初より学生数が増大し続け、校舎や教員宿舎などの確保のため絶えず建物が増設されていく。ジョン・デューイ（1859-1952）が教授として招かれたのは1904年

からで、以降、その理論と実践が反映されたカリキュラム・プロジェクトが実施され、アメリカ随一の教員養成機関として多くの教育家を生み出すこととなる。特に1920年代から30年代にかけて、デューイ門下に多くの学生があつまり、デューイを師と仰ぎプラグマティズムを積極的に中国に紹介した胡適はいうまでもなく、のちに職業訓練学校のモデルを打ち立てようとした陶行知、また中国に初めての公立幼稚園を設立した陳鶴琴などなど、近代的な教育思想、実践の立役者である若き中国人知識人が多く学んでいる。1919年から1920年にかけて中国に滞在し⁽⁴⁸⁾プラグマティズムの教育学説を盛んに紹介したデューイの後を受けて1921年9月から4ヶ月間中国に赴いたモンローも深く中国教育文化界とかかわることになり、彼の教えを受けた中国人留学生たちが帰国後、各地の大学や教育行政機関で教育研究や実践活動の指導的な役割を果たすことになる⁽⁴⁹⁾。

ここで楊蔭楡は特別生として修士論文を書かずに実習その他の活動で単位振り替えとしていたようである⁽⁵⁰⁾が、学内にこもっていたばかりではない。課外でも相変わらず積極的に行動している。徐志摩は日記にこう記している。

1919年11月7日

……ロビンソンの「人心史」を犠牲にして中国学生会に出た。今年は湖南人の陳国鈞が会長で、楊蔭楡が書記である。東部代表の選挙では危うく彼らに巻き込まれるところだった⁽⁵¹⁾。

1919年12月4日

……夜、中華教育研究会⁽⁵²⁾に出席する。楊“大姐”が主席。中国の女学について討論する。楊大姐は無錫英語を何とか繰っている。つかえつかえそれでもどうにかやっと事なきを得る。我が男女の教育家諸君、盛んに意見を発表する。一時間ほど聞いてから退席する⁽⁵³⁾。

この年の5月4日に始まった五四新文化運動および関連する国内の状況、各地の学生の動向はアメリカの留学生にも伝えられていた⁽⁵⁴⁾。また、10月10日に民国成立8周年を記念して開かれた記念行事の会でも、政府が南北に分裂した状態である今、国家としては危うい状態にあること等が中国側の代表演説で述べられ、緊迫した国内情勢の中での留学生の役割を再認識させる叱咤激励の言葉が放たれたようである。楊蔭楡は、こうした国内情勢を折に触れ耳にし、国民教育の必要性を切実に感じ、いよいよ発奮したことだろう

し、ティーチャーズ・カレッジにおけるデューイの理論と実践を取り入れた新たな科目は、英語という新たな言語環境にいることの緊張感とあいまって大いに彼女の知識欲を刺激したと思われる。

1920年2月28日付、ミス・ビグロウに宛てての、現在見ることのできる楊蔭楡の最後の肉筆の手紙からは、アメリカで喜々として動きまわる彼女の姿が浮かび上がってくる。

Whittier Hall 1230 アムステルダム街

ニューヨーク 1920年2月28日

[...] さあ、では私がニューヨークに来てから何をしていたのかをお話します。まずこの秋学期にこのティーチャーズ・カレッジで大学院の講座五つに参加しました。おもに教育哲学、初等教育における測定及び実験、幼児心理学、中等教育においていかに幾何を教えるか、そして家政学といったものです。いくつかの科目は素晴らしくよくて、大いに楽しみましたし、得るところのものも大変大きかったです。中間テストを受けるまではどの学年に入るのかわかりませんでした。今は最上級の学年に入り、きたる6月に学士号を取ることになっています。今期のセメスターでは6つの講座をとって、初等教育の教育法、カリキュラム、教育評価に関するものすべてが上級コースです。目下、いわゆる「プロジェクト・メソッド」なるものに大変興味を持っています。

来年には修士号を取得できるのではないかと考えています。そして、そのあとにイギリスへ短期の研修と、それから教育関係の情報収集のためにヨーロッパの国々へ行きたいと思っています。おそらく帰国は来年の冬になるだろうと思います。

この前のクリスマス休暇に、代表大会出席のためオハイオ州のデモンに行ってきました⁽⁵⁵⁾。会では多くのすばらしいスピーチがあり、世界40ヶ国以上の国からのおよそ8000人の参加者がありました。そのうちおよそ中国人が150人です。ウェルズレイから来たミス・ハートにお会いしました。その時、貴女にお会いできるものと期待しておりましたが、お会いできませんでしたね。[...]

彼女が寄宿したウィッターホールが面しているアムステルダム街はブロードウェイを一本東に行く通りで、コロンビア大学の東門からハーレムと接す

<p>senior now and I am going to get the Bachelor degree next June I am carrying six courses this semester, they are all advanced courses concerning the elementary school education, method, curriculum, and supervision. I am very much interested in the so called "project method".</p> <p>I expect to get the master degree next year and then I want to go to England to study for a short period; and travel in some other countries in Europe to get some information about the education and</p>	<p>Y. Y. Young ^{From a student}</p> <p>Whittier Hall 1230 Amsterdam Ave New York City Feb. 28, 1920.</p> <p>My dear Miss Bigelow,</p> <p>Thank you very much for your letter. I have tried many times to write you, but I failed. I hope you will excuse me. I was very sorry to know that Dr. Cook died so suddenly. He looked very healthy and I never thought</p>
--	---

<p>I have been doing since I came to New York I had five of the post graduate courses here in Teachers College last semester, namely: - Philosophy of education, measurement and experimentation in elementary education, Psychology of Child hood, How to teach geometry in secondary school, and household administration. Some of these courses were wonderfully good I enjoyed and gained a great deal. I was not classified until I took the mid-year examination. I am credited as a</p>	<p>that he was going to die so soon. The package returned me some days ago. I wanted to have this told and buy some flowers for his grave with the money but I did not let you know before you sent me the package. Do you think it could be done?</p> <p>You have asked me about my study several times. It is very kind of you to remember me and be so anxious for me about my work. I appreciate your kind heart very very much. Now I am going to tell you what</p>
--	--

楊蔭楡の手紙 (1920年2月28日付)
(from the archives at Walnut Hill School, Natick, Massachusetts)

る125丁目に向けて坂を下って行く途中、120丁目と交差する角に建っている。ニューヨーク市街地の整備はすでに18世紀中頃から着々と進み、マンハッタンを南北に走る地下鉄は既に1904年にシティーホールからウエスト145通りまで開通しており、また、1901年ペンシルベニア駅オープン、1913年グラントセントラル駅がオープンと、彼女がティーチャーズ・カレッジに移ってき

た1920年にはマンハッタン全域が市街化されており⁽⁵⁶⁾、移動はずいぶん便利になり、クイーンズやブルックリン等へも気軽に行くことができた。

1921年の夏にニューヨークに滞在した木ノ下空太郎は、ニューヨークの市街を「まるで地獄のような処だ。長く住むにたへない」⁽⁵⁷⁾と表現し、その実用重視のそっけない建物と絶えず人々と車が行き交うせわしさを嫌っているが、活発に動き回る楊蔭楡にとって、「車が流水のように流れる」⁽⁵⁸⁾世界で最も忙しく活気あふれる都市ニューヨークは、閉塞する家庭からの解放を体現する「近代の」空間そのもの、女性の明るい将来を約束する希望にあふれたモダンな空間に映ったのではないだろうか。1920年はまたアメリカにおいて女性の参政権獲得に向けて女性運動が大いに盛り上がった年でもある

人々の生活スタイルも変貌を遂げようとしていた。スカート丈の裾が短くなりだし、髪もショートカットにする女性が現れ始める⁽⁵⁹⁾。例えば、アシユカングループを代表するジョン・スローアン（1871-1951）がエッチングで描き出した「Return From toil」⁽⁶⁰⁾には仕事帰りの女性の一団のエネルギーあふれる陽気な姿が示されている。これが描かれた1917年当時すでに「ワーキングウーマン」がニューヨークの街では珍しくなくなっていたことを物語っている。

同じくキャリアを目指す女性として、ニューヨーク市街で生き生きと働き始めた女性の動きを彼女は体全体で感じ、彼女自身の活動の活力にしていたのではないか。だから、猛威をふるったインフルエンザもものともせず⁽⁶¹⁾、注世界の教育者たちとの交流するためには厳冬の中、オハイオ州までの難儀な旅路も厭わず、貪欲に視察の旅にでかける。ミス・ビッグロウ宛ての英文の手紙からは、参加できる限り多くの講義に参加して勉学にはげみ、同時に大小様々な研究会、集まりにも積極的に出かけるまじめで、活動的で、そして向上心に燃えた楊蔭楡の生き生きとした姿が想像できるだろう。もちろんそこに大変な努力があったことは確かである。

こうした努力の甲斐あって、楊蔭楡は、1920年の春には、手紙で示したとおりに学士号を取り、翌年1921年の春には首尾よく修士号が認定され、六月の卒業時に晴れて徐志摩とともに修士号獲得者としてコロンビアの学籍簿に名前を載せることになる⁽⁶²⁾。

徐志摩は「アメリカの大学の点取り主義に嫌気もさして⁽⁶³⁾」、1920年秋に論文を提出したあと、卒業式をまたずにイギリスへと渡ってしまう⁽⁶⁴⁾。楊蔭楡はコロンビア大を卒業した後、引き続いて研修を続け、帰国直前の

1922年3月にはフィラデルフィアでの研修会議に中国代表として参加している⁽⁶⁵⁾。この間、手紙にあったようにイギリスにさらなる研修・視察に赴いたのかは記録がないので定かではないが、いずれにしろ当初の目的を達し、「白人社会」でも同業者との共感を確かに感じて自信を深め、将来への希望に胸を膨らませていたに違いない。コロンビア大学の1921年の卒業写真には、角帽をかぶってマントをはおった男女の卒業生たちが列を組んで、コロンビア大のシンボルであるロー・メモリアル・ライブラリーの階段を下り、参列者が並び、旗を立てたオープンカーが控えるキャンパスの目抜き通りを得意げに歩いてゆく写真がある⁽⁶⁶⁾。その列の中には楊蔭楡もいたはずであり、そこで彼女が博士号獲得に向けてさらなる決意を新たにし、国の期待にこたえうる成果を上げた近代女子教育の草分け的存在であるという晴れがましい気分であったことは想像に難くない。残念ながら帰国後の彼女がたどることになるのは、すべてが期待を裏切ってゆく敗北者としての半生だが、それはのちのことである。

三

さて、ここでもう一度最初の写真に戻ってみよう。楊蔭楡に向かって右、数人離れた三人目の白人系の中年女性の後ろに立つ、蝶ネクタイをつけ眼鏡をかけた面長の顔、顎をやや引いて視線を斜め前方に漂わせている青年、これが徐志摩である。この後籍を移すコロンビア大学は、資本主義の本陣であるニューヨークのマンハッタンに位置し、近代国家の推進力を担うプロフェッショナル集団養成の大学として名声を獲得しつつあった⁽⁶⁷⁾。古典的素養の修練の場とは対極の空間へと変容しつつあったこの大学に、人間性なるものにひどく敏感だったこの青年は、まい進する近代化の進展が当初から必然的にはらむ疎外と抑圧の危険にそぐわぬ何かを感じたのか、第一次世界大戦という悲惨な体験を経て、社会の進化、人間性への盲目的な信頼への懐疑が起り始めた欧州へとわたり、文学の場へと身を投じてゆく。そして近代文学のイデオロギーを支える支配的な言語、英語という外国語との葛藤を通して現代詩人徐志摩が誕生するのである。

一方の楊蔭楡は、国民国家建設の要請にこたえ、女性として最高の身分、環境を与えてくれた国家に恩返しすべく、かつて日本で優等賞をとったときと同じように猛烈に勉学に励んだ。均質な国民を作ってゆく教育という制度

の強力なプロモーターとなることが、もしかすると国家の体制を支えるイデオロギーに盲目的に従うことになりかねないこと、その結果体制に組み込まれそのイデオロギーに利用される可能性もあるなどとは少しも疑わず、その体制の中身を深く問うこともなく、自ら進んで体制整備の流れに身を投じてゆく。

もっともな建前を無錫なまりの「官話」でお説教する楊蔭楡は、徐志摩にとっては頑固で融通の利かない「保守派」に映った。しかし、英語圏の世界では、たとえそれが「無錫なまりの英語」であったとしてもとにかく英語を話し、積極的にアメリカ人との関係の輪を広げようとする彼女の姿は、自らも女性の自立を目指して奮闘してきたミス・ビグロウをはじめとする新しい教育に情熱を燃やしていた人々、或いはアジアの自立を目指す女性を支援しようとするミッションの精神に満ちたアメリカ人には好ましく受け取られたのではない。女性の社会進出に向けて社会も大きく動いていた⁽⁶⁸⁾。そして、英語を身につけつつあった彼女にとって、本来男性エリートの言葉である「官話」ではない英語が「共通語」である教育界、学会の世界は、ジェンダーの枠組みが外れる分、より自由に開かれた空間となっていたのではなかっただろうか。

またアメリカ社会や家庭の状況をよく注意してんでいたという彼女は、各地で開かれる会議や研究会に参加するなかで、実用的な専門職を身につけさせる教育を施す近代的な大学の役割の重要性を大いに感じたに違いない。引き続きヨーロッパへの留学を希望したのも、近代化の流れの大元を見てみたいという探究心があったからだろう。彼女の思想があいまいで形を取らないものであった⁽⁶⁹⁾としても、それは思想的な何物もなかったということではない。英語圏の中で自らも極力英語を使い英語の思考回路で対象を見つめていた時、それなりに新たな思想の形を持ち始めていたのではない。少なくとも彼女の、つたないながらも生き生きとした表現で些事をつづった英文の手紙は、英語圏の環境に実際に身を置いて、極力その文化吸収に努めた彼女自身の人となりや伝えようとする姿と一致している。問題は彼女の中での深められつつあった新たな思考形式そういったものの中国語へ翻訳であり、母語において思想を形にして深める自分のことばをもったか否かである。

彼女は英語を、新たな教育の技法、管理様式、教授法といったものを伝えてくれる道具、いわば文化を翻訳するにあたっての透明な媒体とみなし、この道具を利用してアメリカで学んだ知識を直輸入して中国の状況に当てはめ

れば教育の近代化に貢献することができるとして、必死で学んだのか。一つの文化の翻訳の過程で自らの母語が突き当たるであろう壁を意識することなく。もしそうだとすれば、彼女の悲劇のもとにはここにあったとはいえないだろうか。

平田昌司氏は、従来見過ごされてきた音声の面に焦点を当てて文学革命を論じた興味深い一連の論文⁽⁷⁰⁾で、従来家庭「内」からしきいの「外」へ向かう言葉、すなわち官話や外国語は基本的には男性のものであったが、これが、国民の母たるべき賢い母親を養成するという国家建設の要請によって女性も学べるようになったことと同時に、19世紀西洋の言語教育思想における音声中心主義が伝わったことで、女性が公の場で「しゃべる」行為が、黙認そして奨励されるようになってゆくのが、清末から1920年代以降にかけての中国の公共の場での言葉をめぐる動きであると鋭い指摘をしている。

楊蔭榆、それから今後論じることになる、陳衡哲が位置した時代というのは、まさに、この国民国家建設に向けて「国語」が形成される過程で、女性が「しゃべる」技術を獲得し、それを運用し、そして、自ら「話すように書く」術を身につけてゆく過程のさなかにある。彼女の「挫折した」人生は、国民国家形成に向けて動いた時代と重なっている。

革命家、秋瑾は文字を知らない普通の人々に革命の必要性を訴えるために演説の訓練を積んでいた⁽⁷¹⁾。楊蔭榆の先輩格で、楊蔭榆と同じく、まずは日本に留学し、それからアメリカ留学を経験している胡彬夏も演説は巧みだったという。ただし彼女たちの日本、そしてアメリカ留学の時期は、五四文化運動の前であり、彼女たちが自ら書いて表現したその言葉は、より白話文体に近づいてはいるものの依然として文言文である。体制の中で男と同じように書かれねばならぬ言葉、あるいは、より広範な人々に訴えかける力を持ったより強力な武器となるのは、文言文ではなくより口語体に近く、平易な表現を用いた文体へと時代の要請は変化していた。秋瑾も胡彬夏も文章語における文言・白話文体の矛盾が鮮明になる前にこの世を去った。胡彬夏と比してより体制を支える側の役職につき、そして彼女よりも長く生きた楊蔭榆の場合はどうなったか。

経歴上は「男並み」の経歴を積んだ彼女は、いったい男並みに書く自分のことばを身につけたのか。確かに演説は得意だったようだ。問題は、近代以降、国民国家が形成される過程にあった社会では、意思疎通の手段として人々が身につけるべきことばは、常に音声と文字との二本立てだったという

ことである。日本語と英語とに長けた彼女は、中国の新世代の知識人として必要とされた、新たな世代の女子学生たちの共感を引き出す共通語を書くことができたのか？あるいは、自分自身の中で文字言語と音声言語が足並みをそろえて時代に適したことばにスムーズに変容を遂げえたのか。

陳衡哲は英語ということばを媒介にして、そして良妻賢母にならざるを得ない状況を引き受けたために結果的には、公に演説をするところから一步身を引いたところで書く訓練をすることができたとも考えられる⁽⁷²⁾。同じく女子教育にかかわった陳衡哲と違って、忙しく動き回っていた楊には、帰国後も自室にこもって一人紙面に向かって書く、という時空を持ちえなかったのか。彼女は、書き言葉では白話文体を使わなかった。のちに「女師大事件」での釈明文を格式ばった文言文でつづる彼女には、白話文体を自由に、無意識に書くことができるようになるまでの葛藤の過程が抜け落ちている。白話文体で書くことを身につけるまでの苦勞、これは文字言語と音声言語のかい離が甚だしかった当時の中国にあって、多くの知識人が苦しんだことであるが、それがなかった。楊の場合、新たな教育理論を伝える英語はツールとしての位置づけられ、まずは一段階深めて思考を練り上げるまでの言語にはいかなかった、のか。あるいは、言葉をツールと見る立場から、英語で獲得した知識をより身体に密着した中国語に練り上げて再翻訳する必要も、またそうすれば必然的におこる英語と中国語の間に横たわる齟齬、音声言語と文字言語の両者が近代の中で過渡期を迎えていた中国語の新旧の齟齬に気をとめることもなかったのか。

このようにことばそのものの問題を取り上げる前に、実はことばと不可分の文化移植に触れなくてはならないだろう。しかしここでは論を展開する余裕がないので、次の二点の問題の所在だけ指摘しておきたい。

まずは、彼女が日本留学時期に「優れた」と思い込んだ対象の文化を自らの思想形成の核となる部分に取り込んでしまったのではないかということが一つ。それから、思想形式の枠組みを揺るがすような異文化体験——アメリカでの体験、を自分の母語に直して表現しようとするときのその言葉、すべてがあったのかということがもう一点。

アメリカ留学に先立って、1907年に日本に発った楊蔭楡の日本留学の時期は、日本の女子教育が、明治初期の「男並みに」男と同じ専門領域での達成を目標とした極めて平等な教育理念から大きく後退し、女を家庭に囲い込み、国民を陰で支える母となる「良妻賢母教育」に後退した時期であったといえ

る⁽⁷³⁾。例えば、彼女が優等で卒業した女子高等師範の学則では、立振る舞いから教室での姿勢、お辞儀の仕方など事細かな行儀作法の規定がかなりの紙面をさいて記されている⁽⁷⁴⁾。女子高等師範学校ですら専門的というよりは教養を深める、良妻賢母養成のカリキュラムの傾向があった。というより国民軍を生み出す賢母を養成するのがこの時期の女子教育の目的であった。ジェンダーの枠組みをはずして、国民国家の建設に関与する自立した専門職を目指す女性に十分な内容を提供していたとは考えにくい。日本に留学した女性たちが、さらに専門的な知識を求めて欧米に再留学する場合が多かったことがこの事情を物語っている。

彼女は、必死になって取り込んだ日本語と不可分の「良妻賢母主義」を自らの生き方の深部にまで取り込んでしまった、という可能性はないか。彼女こそ「支配言語を認識内容と不可分のものとして生徒の精神そのものの中に植えつける」⁽⁷⁵⁾日本式教育の成功した例だったのかもしれない。そして、日本語を獲得したと同じ努力で英語に取り組み、英語で取り入れた進んだ知識とそして思考形式の枠組みをすら変容していたかもしれない可能性が、それらを今度は自国に翻訳するというときに、翻訳先の自国の言葉そのものが変化の時を迎えていたことに無自覚であったために、あるいは思想を表現する書き言葉の変容に無自覚であったために、たちまち古い思考形式の枠組みに戻ってしまった。こうは考えられないだろうか。

彼女は、資料からうかがわれる限り様々に活動し、社会問題にも目を向け、国内の情報にも決して疎かったわけでもなかった。それがアメリカから帰国し、国内の新たな思想、可能性に鈍感になってしまったのはなぜか。

いったい中国に帰国後の彼女は自分の考えを、思いを伝える手だてを持ちえたのか。故郷の無錫方言地区での無錫の言葉、教師養成学校で必要とされる「官話」、蘇州の日本人学校で日本人に至極自然に対応するレベルの日本語、英語圏の中での英語、と、敏感な感性は、それぞれに分岐した状況に応じた場面での、それぞれの話し言葉を使い分けることははできた。それから、エリート教育者として、外国語の一定レベルの書く能力及び、中国人エリートとしての公式文＝文言文を書く能力はあった。しかし、中国が一つの国民国家に向けて求心力を強め、話し言葉の上でも、書き言葉の上でも統一した全体に覆いかぶさる「共通語」が要請されていた時期にゆきあわせてしまった彼女は、たとえばアメリカで示した平易な生き生きとした英文を、同じく平易な生き生きとした中国語に書くことができたか、という問いは立てら

れるだろう。

つまり、もしかすると、彼女の表現手段が、自らの思想の柔軟性にタガをはめる役割をし、その結果公の場での意思疎通の障害になっていたのではないか。少なくとも、思惟形態を支配する言語形成の何かが、コミュニケーション不成立を導いたのではないか。これが、五四以降の、ジェンダーの枠組みを広げようとし、そこでの言葉がより音声言語と文字言語の乖離の弊害がより少なくなった世代の女子学生たちとの齟齬を作り出した最大の原因になったのではないか。これが一つの問いである。

ただ現段階では急性に答えを出すことはできない。はじめに述べたように、ここでの目的は、表舞台から消えてしまったその痕跡が抜け落ちている彼女の「不在」の意味を問いの始まりとすることである。ひとまずは不在を不在のままとし、様々な関係性が編みこまれた20世紀初頭の時代のもう一つの網の目であり、「男並みに書く技」を身につけた陳衡哲の「ことば」の獲得過程を見てゆくところへと次の一歩を進めたいと思う。

注

- (1) *The Chinese Students' Monthly* (November 1919). 以下 CSM とする。この雑誌は1905年に結成された The Chinese Students' Alliance of the Eastern States の機関紙としてはじまり、当初の名称は *The Chinese Students' Bulletin*。1907年11月号（第3巻第1号）よりこの名称となり1931年4月号（第26巻第6号）まで刊行。1911年に顧維鈞（1888-1985）がいくつかの地域に分かれていた学生会を統一したのちは、全米規模の留米学生雑誌となる。清末民初の留米中国留學生の動向を見るには不可欠の資料である。この雑誌については以下に紹介あり。『東方雑誌』第14巻第12号（1917年12月）及び Stacey Bieler. "Patriots" or "Traitors"?: A History of American-Educated Chinese Students. New York: M. E. Sharpe, Inc., 2004. 尚、1919年の第15回東部学生大会には総勢150名の代表が参加したということである。(CSM November 1919)
- (2) 原文は楊絳「回憶我的姑母」（『將飲茶』香港三聯書店、1987年所収）より。邦訳は、楊絳「叔母の思い出」（『浪漫都市物語』JICC 出版局、1991年）所収。
- (3) 1924年春、中国初の女性校長として女子高等師範学校（1925年に女子高等師範大学となる）に就任した楊蔭榆と、その保守的な学校運営を不満とする教員、学生が対立し、一年以上にわたって紛争が続いた事件。北洋軍閥支配に対する市民や学生の革命支持の運動を背景とし、北京教育界全体が大きく揺れ動いた。当時女子師範の教師だった作家魯迅および弟の周作人ら、学生を擁護した教員たちが楊蔭榆の行為を強く非難した。

- (4) 何玲華『新教育・新女性——北京女高師研究1919-1924』中国社会科学出版社、2007年、pp. 155-156。ただし、筆者が調べた限り、青山学院大学の学籍簿その他の記録に楊蔭楡の名前はない。
- (5) 注(2)参照。以下楊蔭楡に関する紹介は特に断らない限り楊絳の回想録に依っている。
- (6) 「女校長の夢」魯迅論集編集委員会編『魯迅と同時代人』(汲古書院、1992年)所収。
- (7) 『婦女雑誌』は1905年1月から1931年12月まで中国で定期刊行され主に女性問題を中心に取上げた雑誌。これについては、村田雄二郎編『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』(研文出版、2005年)で様々な角度からの分析がされている。
- (8) 胡彬夏は江蘇無錫の人。1902年から1903年、日本の実践女子校に留学。在日中に「共愛会」を組織し女子教育及び女性の権利の拡張を訴えた。1907年江蘇省より官費留学生としてアメリカに派遣。マサチューセッツのウォルナツヒル・スクールで学んだあとハーバードへ入学。そこでのちの夫となる朱庭琪(後の滬杭甬鉄路局の英文書記)と知り合う。帰国後、1915年から1917年『婦女雑誌』の編集をつとめ、多数の評論を発表する。以上、張素玲、前掲書(pp. 46-49)より。ただし、ウォルナツヒル・スクールを卒業後の進学先はまずはウェルズレイ・カレッジに入学しているが、その後ハーバードに入ったかは未確認。注(30)参照。尚モンテッソリの教育思想、メソッドをはじめて中国に紹介したのも彼女である。
- (9) 初出は『留美学生季報』1917年第6期。署名は莎菲(陳衡哲のペンネーム)。ただし従来、現代白話文で書かれた最初の小説といわれている魯迅「狂人日記」(1918年発表)の方が小説としての完成度が高い。
- (10) 楊步偉『一個女人的自伝』傳記文学出版社、1979年。
- (11) 彼女は『婦女雑誌』の編集を引き受けた1916年に同雑誌に論文を多数発表している。
- (12) 彼女の最初の滞在地、ウォルナツヒル・スクールのアーカイブに彼女の自筆の英文の手紙3通、それから、ウォルナツヒル・スクールの校長と中国駐米教育部長、ニューヨークのティーチャーズ・カレッジ秘書との往復書簡6通が残されている。今回の論述で使用したのもこの九通の手紙である。これらの手紙はウォルナツヒル・スクール(Walnut Hill School, Natick, Massachusetts)のご好意で資料の提供としていただき、ならびに転載の許可もいただいた。
- (13) 楊絳、前掲書。
- (14) 『教育雑誌』第10巻第8号(1918年8月)。
- (15) CSM(November 1918) xiv-1:55-58.に“Welcome to the newcomers”として全員氏名と受け入れ先の学校が記載されている。徐志摩は私費留学である。航路及び大陸横断経路については徐志摩が梁啓超にあてた書簡に次

の記載がある。「生于八月中发沪，道出横滨檀香山，阅二十一日，而抵金山，然后横决大陆，历经芝加哥纽约诸城，今所止者，麦斯省之晤斯忒也。」（陳从周編『徐志摩年譜』上海書店、1981年。該当の梁啓超あて書簡の引用は11p.）。また、上海を発った「南京号」には汪精衛も乗船していたことが徐志摩の「西湖記」（1923年10月1日）よりわかる（『徐志摩未完日記（外四種）』北京図書館出版社、2003年、159p.）汪精衛がこの時サンフランシスコまで乗船したのかは不明。横浜で下船した可能性もある。1918年という時期の複雑な局面がうかがい知れる。

- (16) 中国人のアメリカ留学に関しては、舒新城の『近代中国留学史』をはじめすでに多くの研究がなされている。前掲拙論で取り上げた以外に今回主に参考にした資料、著書は以下の通り。

- ・陳学恂、田正平編『中国近代教育史資料彙編：留学教育』上海教育出版社、1991年。
- ・阿部洋『「対支文化事業」の研究』（汲古書院、2004年）の第I部第2章「清末民初におけるアメリカの対華教育活動」および補論「アメリカの対華文化事業」。
- ・鈴木智夫『近代中国と西洋国際社会』（汲古書院、2007年）、第2章「清朝政府による官費アメリカ留学生派遣事業の研究」。この著書で紹介されている祁兆『游美洲日記』を始め清末の知識人の海外視察日誌、見聞録は、鍾叔河主編『走向世界叢書』（岳麓書出版、1985年）として刊行されているので、原文を読むことができる。
- ・李喜所、劉集林他著『近代中国的留美教育』天津古籍出版社、2000年。
- ・李喜所『近代留学生与中外文化』天津出版社、2006年。
- ・孫石月『中国近代女子留学史』中国和平出版社、1989年。

- (17) CSMでは特に1915年の3月から6月号にかけて、日中米の動きと政治情勢に対する様々な意見の特集が掲載されている。1915年4月号では、梁啓超の文章の英訳（“China's case against Japanese demands”）が載っている。

- (18) 『東方雑誌』第15巻第8号（民国7年8月）に「留美学生監督より新規留学生の渡米以前準備についての意見書（民国6年12月22日）」が掲載されている。おそらく教育部はこれに則って留学生への配慮を行ったと考えられる。整えられつつあった留学制度の一端が分かるので以下に関連する項目を訳出しておく。

一、上海駐在米國領事館が留学生にパスポートを発行する際、毎年困難が多い。学生は対応にまだ不慣れか英語に習熟していないためにパスポートの取得が容易ではなく、数か月留め置かれ、出発できないことがあるがその費用は出ないため、大洋を前に嘆くことになる。ゆえに今後は留学生のパスポートは（教育）部より外交部に申請して発給してもらうことが望ましい。

一、受験生には、申請時に写真数枚を提出させること。寸法および様式は

外交部によるパスポートに関する規定通りとする。試験に合格した際はこの写真を外交部に送ってパスポートを申請し、教育部から各学生に送れば手続きを簡略化できる。

- 一、学生は上海に集まるときは、適当な場所を一所選び、そこに集めて宿泊させれば手続きも管理も行いやすくなる。青年会館の宿舎が夏季休暇中は空き室が多いと聞いているので、もし借りることができれば、部屋は清潔かつ料金も安く済む。学生の道徳面でも有益である。
- 一、今期の学生の米国到着はやや遅れた。米国に到着したあと、休息も取れず、あわてて入学しなければならず、大変であった。ゆえに時期の新留學生が米国に向かうときは、教育部によってあらかじめ乗船切符を予約することが望ましい。各学生に7月下旬に上海より出発させれば8月末にはサンフランシスコに到着し、9月の頭には東海岸に到着でき少し休養を取ることができる。そのあとであわてずに入学すれば、学生の心身にとっても学業にとっても有益である。
- 一、出発前に教育部が人数、船名、日時をあらかじめ監督に電報で知らせること
- 一、今期の学生の渡米にあたって、教育部は8月30日に上海に集合し乗船する旨を通達したにもかかわらず、時が来ても依然逗留して出発せず、いまだに米国に到着していない者がいる。今回監督は、アメリカ上陸の際、問題が起きぬよう前もって連絡手配していたのだが、しかし毎年同じである。不都合極まりなく、移民局との交渉も容易ではないだろう。もし集まって一緒に出発するのならば、留め置かれることもないだけでなく優遇もされるだろう。なかなかそろわず、先に来たり後からだったりすれば何度も人に頼まねばならず、大変都合が悪い。次期の新規留米學生は、医師に出国がふさわしくないと診断されたもの以外は、いかなる理由であれ、必ず全体で行くようにすること。病気で遅れたものは、別出発での対応が受けられるよう、病が癒えて出発するときに、氏名と船便、日時を電報にて知らせること。
- 一、学生が米国に行くときは、必ず母校の履修規則を数部携えること。入学の交渉の際に各大学は必ず詳細な履修規則を調べて、それから相応の学年に編入を決めるからである。英文の履修規則があるならば入学手続きの際により便利である。
- 一、今期の学生がアメリカ大陸に上陸した時に、ほとんどが旅費を使い切ってしまう、学費を工面できなかったものは東部に来ることができなかった。こうなった原因として、おそらく、地方から来たものは、北京で試験を受けてから、故郷にもどって旅費を受け取るため、往復にかかる費用を考えずに旅費をそれに充ててしまい、またきちんと計算もしなかったために、費用を使うことになってしまった為であろう。しかし、旅費は業経部の規定で追加されることはない。今後は留学準

備金としての200元は他に流用することがないように、学生が上海に到着してから給付すべきこと。留学旅費の500元については、教育部から派遣する担当者が管理すること。一等席の乗船切符を代払いを除く、その他の支払は、米国到着後に自動車および他の旅費の支払いができなくなるように必ず乗船してから各学生に給付すること。

- 一、学生は出発前に、貴教育部を通じ外交部からハワイ駐在領事に船名と日時を打電してもらい、船が埠頭についたときに世話してもらえるようにすること。学生は長い航海で船酔いの苦しみを味わっているだろうから、埠頭についたときは必ず上陸して休ませなければならないが、もし領事館の保護がなければ問題が起きるだろうからである。
- 一、学生は乗船前に米人医師のところに行って健康診断を受け、病気ではないことの証明書を出してもらい、乗船後に拘留されることのないようにすること。上海黄浦江の左岸付近に施徳理医師がおられる。Dr. Streetの住所はLimnel streetである。中国人学生に対してとても親切であり、健康診断でもむやみに厳しくすることはない。教育部より各学生にそこで診断してもらうようにするのがよい。
- 一、学生は旅行準備の際は、シャツ等を除いてその他の衣服は中国を出てから調達し、多くを用意しないこと。服装の様式が違うので、米国で使用にふさわしいとは限らないからである。冬の厚い外套だけは、出国以前に用意しておくこと。途中気候の変化が激しく、夏といえども冬服が必要となり、寒さのために病気に罹らないようにすることが必要となるからである。

- (19) 陳从周編『徐志摩年譜』前掲書、pp. 11-14。「今日之世、内憂外患、志士責興、所謂時勢造英雄也。時乎時乎？ 国運以苟延也今日、作波韓之続也今日、而今日之事、吾属青年、実負其責、勿以地大物博、妄自誇誕、往者不可追、來者猶可諫」

国家建設への責任と自覚は当時の留米学生たちにも共通のものであり、胡適、呉密、そして徐志摩等、民国初期の男子留学生はそれを留学中に日記の形で残している。しかし、アメリカに留学した女子学生たちの「留学日記」は、興味深いことに、現段階では存在が確認されていない。この時期までに限って言えば、彼女たちより一世代前の外交官夫人単士厘が夫に随行して日本、欧米を巡った印象をしたためた『癸卯旅行記』及び『帰潜記』（鍾叔河主編『欧洲十一国游记二種』岳麓書出版、1985年、所収）のみである。単士厘の日記については、坂元ひろ子『中国民族主義の神話』（岩波書店、2004）に紹介がある。

- (20) 虞坤林整理『徐志摩未刊日記』北京図書館出版社、2003年、115p。
- (21) CSM (November 1918) に“Special News Articles, reception to the new students from China”として「留美学生会の西海岸セクションによって新規留学生の歓迎会が9月4日にサンフランシスコで開催され、200名あまり

の出席者。ピアノ、バイオリン、歌などの演奏も併せて行われる。」と記されている。

- (22) ウォルナツヒル・スクール, *SEEKING MODERNITY IN CHINA'S NAME: Chinese students in the United States, 1900-1927*. California: Stanford University Press, 2001: 138-139、及びウォルナツヒル・スクールのホームページ <http://www.walnuthillarts.org/> の紹介より。この学校で2年間学んだ胡彬夏が『留美学生年報』(1911)に寄せた「胡桃山女塾の校長」で詳しい学校紹介を行っている。尚、アメリカを代表する詩人、エリザベス・ビショップがここで学んでいる。
- (23) 有賀貞『アメリカ史概論』(東京大学出版会、1987) 248p。当時のアメリカ社会の状況を述べた部分は主にこの概論を参考にまとめたものである。
- (24) F. L. アレン著、富士久ミネ訳『オンリー・イエスタディ』(筑摩書房、1993年) 13p.
- (25) 例えば呉宓(ハーバード留学期間は1917-1921)はその日記で、勉学はそっちのけで贅沢に遊び男女交際に熱を上げているとニューヨークの中国人留学生を批判している。(呉宓著、呉学昭整理『呉宓日記Ⅱ』生活・読書・新知三聯書店、1998、60p.)。CSMでも学生大会の写真を見ると、1918年あたりから中国人留学生の中にも、伝統的なチャイナドレスの上着ではなく、流行の洋装で断髪にする姿が出始めていることが分かる。従来のまじめな大会が男女交際の場になってしまったと批判する声も学生たちから上がっていた。徐志摩も、学生の質が胡適たちの時代に比べて大いに下がったと日記で述べている。
- (26) 坂辰辰朗『アメリカ大学史とジェンダー』(東信堂、2002年) 49p。アメリカの大学における学生生活について論じたものについては、たとえば Helen Lefkowitz Holowitz. *Campus Life: Undergraduate Cultures from the End of eighteenth Century to the Present*. New York: knopf, 1987. 特に女子学生の状況については Chapter nine, College Women and Coeds.
- (27) 胡彬夏の当時の英語表記は Pin Hsia Hu。彼女はのちにハーバードの留学生朱庭珙と結婚したため、Walnut hill High schoolの校長の手紙の中では、Mrs. Chu, T. C. と表記されている。CSM (January 1908) I-3: 127では“Hu, P. H Miss-Walnut High School, Natick, Mass”との記載がある。
- (28) 当時の教育次長、袁希涛の娘。徐志摩「留美日記」前掲書、114p. より。
- (29) 教育部長とそれにこたえるミス・ビッグロウの手紙(筆者訳)は次の通りである。

Wallnut Hill School 校長 様

拝啓

ミス Y. Y. ヤンが貴校に来ることを告げる9月の日付の私の電報と手紙は、すでにお手元に届いているかと存じます。彼女が貴校でどのように過ごしているのか気がかりです。様子をお知らせくださるのであれば、こちらと

しては大変ありがたく存じます。
お手数をおかけしますが何卒よろしくお願いたします。

敬具
教育部長 UY.Y.

1918年11月2日 ワシントン D. C. 2015
19st. N. Y. 中国教育部 U. Y. Yin 様

拝啓、

ミス・ヤンが9月に私たちの学校に来ることを告げる電報と手紙を送られたというあなた様の10月30日付お手紙を、本日受け取りました。電報が最初に届いたとき、私どもの学校には余分の部屋がありませんでしたので、ミス・ヤンをお引き受けできるかどうか分かりませんでした。けれども、ほぼ同じ頃、私どもの以前の学生であったミス Sze Tsong Yuan——彼女は今ウェルズレイ・カレッジにおります——から電話があり、同じくウェルズレイにいる（ミス・ヤン）の親戚が、（ミス・ヤンを）ウォルナッツヒルで受け入れてくれないかと言っていると伝えてきました。彼女（ヤンの親戚）がその女性を連れてきたのですが、彼女こそあなた様が電報で知らせてくださったミス・ヤンその人であることがわかりました。ミス・ヤンは、ミス・ユエンと一緒に出向いたときに、上海のミセス T. C. Chu——彼女もまた私たちの学校の卒業生で大切な友人ですが、の手紙を携えてきました。

ミセス・ジューはミス・ヤンについて、彼女が人格的にも学識も立派であると熱意あふれる調子で推薦していますので、私どもはもし可能であるならば彼女を受け入れたいと望んでおります。彼女（ミス・ヤン）がミス・ユエンの友人でありかつ親戚であるという事実は、強力な薦です。このことに加えて、ミス・ヤンは有能で素晴らしい女性だという印象を私どもに与えました。それゆえ、私どもは、彼女が望むように、ここで私どもと一緒に食事ができると同時に、課外での時間もできるだけ多く過ごすことができるように、学校の近くに彼女のために部屋を用意いたしました。ミス・ヤンは当初はどのクラスを取るべきか決めておりませんでした。彼女はまず最初に多くの授業を見てみたいと申しておりました。彼女は数学を教えておりましたので、代数と幾何の授業を参観し、また、一番適したクラスを見つけるために、多くの異なる英語の授業を参観しました。聖書とフランス語の勉強を直ちに始めております。彼女は教授法を視察するために通常授業時間を学校と教室で過ごし、そして自分の授業以外の時間は勉強に充てています。

昨今のインフルエンザが流行っている間、私どもは、ミス・ヤンがいつも学校内にいることが安全であると考えました。このため保健室に住める

ように致しました。これは彼女が病気になったからではなく、他にどこにも彼女用の部屋がなかったからです。幸い、ここでは誰も病気にかかっておりません。それでミス・ヤンは、彼女が滞在している女性の家に戻る事が妥当であるとわかるまではこの部屋にいられることになりました。

すでに申し上げたようにミス・ヤンは急速に英語の能力を高めています。こちらに来た当初よりもずっと早く私どもが言うことを理解し、ずっと滑らかに話すようになりました。書物を読む力と同時に新聞や雑誌を読む能力も身に付けつつあります。

彼女は、自分の目標は、来年コロンビア、ティーチャーズ・カレッジに入り、教育学を学ぶための準備をすることであると言っています。このため、彼女は私どもの学校ではミセス・ジュとミス・ユエンが学んだ授業と同じものは受けておりません。彼女は、コロンビアでの講義や授業での英語がわかるようにと主に英語力を付けることに専念しております。彼女の入学許可の資格が何になるのかわかりませんが、おそらく、彼女が日本の師範学校を卒業しており、また北京女子高等師範の学監だったということから、入学許可は出るだろうと思います。

先に申し上げましたように、彼女はよくやっています。またフランス語と英語の運用能力において大きな進歩を見せています。またご報告申し上げたいと存じます。どのくらいの頻度でご報告したらよろしいのですか？ 正式な報告書が必要でしょうか。私どもはミス・ヤンがこの学校にいることを喜んでおりますと同時に、彼女が職務を果たし、彼女が望む目的を達成できることを望んでおります……F. B. 校長

- (30) 中国人女性のアメリカ留学については Ye, Weili 前掲書 pp. 114-152 を参考にまとめてある。尚、李喜所『近代中国的留美教育』前掲書 (55p.) では金韻美、許金菊をそれぞれ金雅美、柯金英としている。
- (31) 盧燕貞『中国近代女子教育史』(文史哲学出版社、1989年) 44p.
- (32) Ye が前掲書 (pp. 142-144) で述べているように、CSM に発表される女子学生の論文のテーマも1920年あたりから変化してきている。たとえば1918年6月に発表された懸賞論文ではテーマとして上位三人のうち二人が“American Home Life”を選び、まずは家庭の中での女性の役割に注目して述べているが、1920年以降“Women’s Place in Business” (November 1922)、“Chinese Women’s Place in Journalism” (March 1923) と専門職への意識が明確に打ち出されるようになっている
- (33) 最近の良妻賢母論については、陳延媛『東アジアの良妻賢母論——創られた伝統』(勁草書房、2006年)がある。日本の女子教育との関係は小林善文『中国近代教育の普及と改革に関する研究』(汲古書院、2002年)に言及あり。また中国女性史研究の分野で多数の論文が発表されている。
- (34) 1918年12月24日付け、ミス・ビグロウからティーチャーズ・カレッジ担当者あての手紙。

- (35) CSM (January 1914) VI-3 に、1913年11月3日に胡彬夏がコーネル大の女子学生に対して行った演説“The Women of China”が掲載されているが、そこでの彼女の紹介に、ウェルズレイ (カレッジ) とある。陳延媛も『東アジアの良妻賢母論——創られた伝統』(勁草書房、2006年)で彼女について論じているが (pp. 174-178)、そこでも『申報図画週刊』第82号を引いて、留学先をウェルズレイとしている。尚、1913年10月には胡適が(おそらくコーネルで)彼女と会い、知識も豊富でしっかりとした意見も持っている得難き人材であると称賛している。(胡適『胡適留学日記(一)』(台湾、遠流出版公司、1986年) 132p.)
- (36) フレミングハム州立大学図書館のご好意で Archive/ Special Collection Library 所蔵の学生名簿を調べていただいた。その“The State Normal school Framingham Entrance Register “September 1918” に「Yang, Yin Yu」の名が見える。
- (37) 1919年1月10日付ウォルナッツヒル・スクール校長ミス・ビッグロウがコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ秘書掛 U. アプトンに宛てた手紙より。その中でビッグロウは1月3日の手紙と行き違いに楊蔭榆がマサチューセッツの師範学校へ行くことを決めたこと。それは2月からの正規コースに入るためおよびアメリカの師範学校の状況視察のためであることを述べ、またティーチャーズ・カレッジの紀要と教育コースのガイダンス書類を楊蔭榆に送るよう依頼している。
- (38) CSM (March 1919) “club news Wellesley We Wellesley” ウェルズレイ支部のニュースとして、楊蔭榆ともう一人の中国人留学生の5日間の視察を歓迎し、楊蔭榆の歓迎のためにディナーパーティーが開かれたこと、そこには歴史学部の主任教授である Miss Kendall (*A Wayfarer in China* の著者)、英文科の Miss Hart、および北京 YMCA の General Secretary である Miss Severin も招待されていたとの記述がある。
- (39) “150 Years in Framingham” (<http://www.framingham.edu>) によると Normal School は、フレミングハム州立カレッジの前身。1839年合衆国最初の女子師範学校としてマサチューセッツ州レキシントンに設立され、1853年にフレミングハムに移る。教員成学校としてアメリカ各地の模範校となり、全米および海外にも教師を派遣、各分野の女性パイオニアを養成。1898年には新たに家政学科が設けられ、1920年代にかけて教育学の専門コースが整えられ、1932年、フレミングハム州立ティーチャーカレッジに改称。1963年に共学となり1968年に現行の名称に改称する。
- (40) ちなみに、カリキュラムが、昔ながらの3学期制(秋、冬、春学期)であることを知らせると同時に、学校案内に教育部の U. Y. Yin の名前を掲載したことも抜かりなく書いている。自ら設立した学校の発展を目指す校長として中国教育部との関係は強めておく配慮が働いたのだろうか。中国の女子学生とアメリカ、そして日本の女子学生及び教員たちの交流関係を比

較検討するとさらに興味深い局面が出てくるだろうと思われる。

- (41) この論考の最初に掲げた写真がこの時の集合写真である。この東部学生大会についてはCSMに開催の知らせ (June 1919) と結果報告 (November 1919) 掲載されている。留学生数が増加し様々な活動が盛んになった時期の学生大会としてリクリエーション分野でも大がかりな大会になったようである。但し、趙元任は「これまでになくひどい会で今後は参加しないだろう」という感想をCSMに寄せている。お祭り騒ぎの雰囲気があったようである。
- (42) 有賀、前掲書。および Braian J. Cudahy, *Cash, tokens. And Transfers: A History of Urban Mass Transit in North America*. New York: Fordham University Press, 1995.
- (43) 楊絳「回憶我的姑母」『将飲茶』三聯書店1987所収、「解放脚」についての言及は79p。纏足を「解放」する難しさ及び纏足と近代性の関係について、坂元ひろ子『中国民族主義の神話』前掲書の「第三章足のディスコース」参照。旅行に関して言えば、徐志摩もよく動いている。徐の日記やCSMの「STUDENT WORLD」欄などから、中国人学生同士互いにたずねあい、あちこちの会議に出かけ、盛んに交流があったことが分かる。
- 楊蔭楡の場合はおそらく列車での移動がほとんどだったと思われるが、徐志摩は1919年8月2日に車で留学生仲間とハイキングに出かけている。(「留美日記」前掲書、pp. 102-104) アメリカで自動車が普及するのは1920年代以降ではあるが、それ以前すでに上流階層では馬車に代わる乗り物として使用が広まりつつあった。
- (44) The Ithaca Chinese Students' Alliance: イサカ中国学生会のこと。1904年に設けられたこと等簡単な紹介が「留美中国学生会小史」『東方雑誌』第14巻第12号 (1917年12月) 172p. に見える。
- (45) 徐志摩「留美日記」前掲書、pp. 114-116。日付は1918年8月18日。以下に楊蔭楡について言及した部分を訳出しておく。

さて、10名の女性軍のうち既に9名については述べた。残るは楊学監である。(皆は彼女をヤン「小姐」と呼んでいるが、「小姐」にはぞっとしないでもない。いっそ「ヤン大姐」と呼べばいいのに。彼女はオールドミス「小姐」なのだから。ミス、と呼ぶのならまだいい。「小姐」と「ミス」は微妙に違う)。僕は敬意を表し、彼女を大本営の統帥とみなしている。確かにその資格はあるし、ご自分もそのようにお考えのようだ。年の頃は40歳前後、だから容貌について云々すべくもないだろう。けれど以前、董を訪ねて「呉城」にやってきたときは、ご自身の年を忘れてめかしておられた。顔に化粧をほどこし、柄物の薄地の上着を羽織り、頭に真っ赤な花飾りのついた帽子をかぶって、おまけに花柄模様の洋傘を広げ、しゃなりしゃなりと歩く様が、まるで美しき乙女といったところだった。それがイサカに来てからは元に「反」って質素に「返」り、本来の面目を取り戻した

のは、やはり身の程をわきまえている。彼女に会った中国人ならば、誰もが国粹保存派というだろう。その是非はまずおくとしよう。彼女の来歴を僕はよくは知らない。ただ江蘇無錫出身で、尊兄もまた留学組であったこと、彼女自身は日本に留学しており、離婚か婚約を破棄するかして（真偽のほどは知らず）おり、まず女学校の教員それから北京師範の学監を歴任したということだけ耳にしている。当然中国の女性界では一、二を争う人物、アメリカに来るといっては当然自らを非凡であるとみなし教育者を自任している。だから、船上では任堅となんでも意見が一致し、大いに意気投合していたわけだ。性格は非常に厳格で実直、おそらく小学生にお説教を垂れるのに慣れてきたためだろうが、われわれ大学生に対してもそんな態度が見え隠れする。教育者を自任するだけあって、当然一般の女子学生よりも国内外やアメリカの家庭状況に注意している。その考え方は穏健保守派。彼女にとって旧道徳が引き下がることは大いに遺憾であり、中国が欧化することには反対、部分的な変革を主張しているが、そうはいつでもしっかりした見解があるわけでもない。こういった思いでいるところに、廊さんたちの活発なさま、羅刹庵のダンスパーティーを目にして、非常なる居心地の悪さを感じている。ますますひどくなり、やりすぎだとさらに董時にもかって「イサカの中国人学生は、内心は皆下劣である」とまで言ってしまった。心根が誠実ではないものが数名はいるかもしれないが、こんな風に漠然とでたらめを言うものではない。「下劣」という言葉の定義だつて下しがたい。これを聞いて僕も楊学監に寛容でありすぎることにはできないと感じたほどだ。たぶん生まれついて実直なのかもしれないが。当時董時に問い詰められてかとなり、とっさに言葉を選ぶことができなくてつい口をつくままに言ってしまったのかもしれない。先週の金曜日、侯家源の提案で、イサカ学生会の名義で、中国人学生全員を招いての正式大会が大同クラブで開かれた。プログラムはうまく組まれているとは言えなかったが、ただ蔣廷甫の演説でかなり盛り上がった。ところが侯先生、気を良くして、人を遣わして楊大姐に演説を頼んだ。彼女は最初は辞退していたものの断りきれず、終いには申し出に応じた。ところがこれが陰口を取りざたされるもとに相成ったという次第。ここで彼女の演説の要旨をまとめてみよう。まず第一の主張として、体を鍛えて国のために尽力すべきだということ。二番目に、目下中国人にとっては臥薪嘗胆があるのみで、歌やダンスにうつつを抜かすべきではないということ。そのあとすぐ、アメリカナイズには賛成しないと述べた。言わんとする中身からいえばどれもが金言で、ぼくはその忌憚ない物言いに敬服する。彼女は皆と違って回りとどい言い方をしない、つまり人々を罵ったわけだ。それで皆の怒りを買うことになった。皆が怒ったからといって、彼女の演説のまっとうさを否定するものではない。僕は終始楊氏に共感する者の一人である。（…略…）多くが彼女を失礼だと非難しているようだが、それはつまり彼女の訓戒を

受け入れがたいということだ。一部の者は適当に聞き流し、深く考えずによし、得難い、などと言っている。また、一部の直接名指して叱責されたものは、その場で言い返せなかったのが、当然陰で好き放題の言葉を吐いていた。おまえはどう思うのかと聞かれたならば、僕は彼女に共感すると答えるだろう。彼女が罵るのには道理がある。しかも明らかに不利になることが分かっているのにそれでも憚りなく思い切ったことをいう。確かに大本営の統括化の学監、楊蔭楡だけあるのだ。筆記を埋めるために、誠実さを犠牲にして、軽薄に好き勝手を書いてしまった。尊敬すべき女性諸君に對しまったくもって罪作りであった、南無阿弥陀仏なり！

- (46) “Columbia University Catalogue 1919-1920” 192p.
尚徐志摩が入った Livingston Hall はコロンビア大学の男子学生宿舎。楊蔭楡が入った Whittier Hall はティーチャーズ・カレッジの女子学生宿舎であった。
- (47) ティーチャーズ・カレッジについては以下を参考にした。
Lawrence A. Cremin, David, A. Ahannon, and Mary Evelyn townsend. *A History of TEACHERS COLLEGE Columbia University*. New York: Columbia University Press, 1954. 及び Andrew, S. dolkart. *Morningside Heights: A History of its Architecture & Development*. New York: Columbia University Press, 1998: 224-243.
- (48) デューイはちょうど1919年～1921年に中国および日本への遊説に出ていることから、楊蔭楡はデューイから直接教えを受けることはなかったと思われる。楊蔭楡の学んだ当時のティーチャーズ・カレッジでの授業やカリキュラム研究等は今後検討が必要である。
- (49) 阿部洋、前掲書 pp. 935-1025. コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジと中国教育界の関係及び、ポール・モンローの中国教育界における影響について詳しい紹介がある。
- (50) ティーチャーズ・カレッジの1921年履修案内に、特別生の項目があり、論文を単位および実技で振り返ることができることが記されている。筆者が調査した限り、コロンビア大学（およびティーチャーズ・カレッジ）には楊蔭楡の論文、レポート等は残っていない。
- (51) 徐志摩「留美日記」前掲書、132p。
- (52) Chinese Educational Club of Columbia Teachers' College。1815年 に設立され1934年時点で50名の中国人の会員と10名の名誉会員がいた。（“Memorandum” Institute of Pacific Relations, American Council, Vol. 3, No. 7. (Apr. 6, 1934)）この研究会には胡適も参加している。
- (53) 徐志摩「留美日記」前掲書、145p。
- (54) この年のCSM 11月号では“Home News”の欄で国内の学生運動の様子が詳しく紹介されている。また“Club News”のコロンビア大学の欄では、11月7日に開かれた月例会で、実際に学生運動に参加し現在コロンビアに留学

中の学生自身による生々しい体験談が語られたとある。徐志摩の日記（注51）にあるように楊蔭楡は中国語の書記に選出されている。彼女も同席し、五四学生運動の状況を実際に耳にしたわけである。尚、CSMではこれより先1918年11月号より“World Progress”の欄が設けられ、世界各国の情勢が紹介されるようになっていく。

- (55) CSM (December 1919) IX-2: 42-43に言及がある。規模の大きな大会だったらしいこと以外具体的な状況は分からない。
- (56) 大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市4 ニューヨーク』（東京大学出版会、1987年）pp. 49-63。当時のニューヨーク市の建築状況については、小林克弘『ニューヨーク 摩天楼都市の建築をたどる』丸善株式会社（平成11年）、『アール・デコの摩天楼』（鹿島出版会、1990年）等を参照。
- (57) 大正10年7月5日付の妻にあてた手紙。「このホテルの窓からも沢山の背の高い家が見える。一つ一つは二十階もあって立派なものだが、それが揃んでいる処は、舞台裏の大道具のやうな感じで好印象ではない。建物にDignityがなく、実用一方だから。」とも言っている。『木ノ下空太郎全集』第12巻（岩波書店、1951年）pp. 374-375。また「北米通信」（『木ノ下空太郎全集』第10巻、1949年）でも、ニューヨークの高層建築を「その人心を残酷に圧迫するは之に於て更に甚しい」、「市街の生活はこの上もなくごたごたして居ます」とある。これをたとえば、中国人の留学生が、鉄筋コンクリートの高層建築を「雅致可觀（趣があり素晴らしい）」（王文培「留美所見」『東方雜誌』第16巻第x号、1919年10月）と表現するのと比べると、初体験のそれぞれのニューヨークの近代化への受け止め方の違いが伺われて興味深い。
- (58) 「タイムズスクエアという地下鉄の大きな駅があるが、ここに来てみれば、おお、行きかう人々が実に蟻よりも多い。（…略…）それから五番街、よく「車は流水の如し、馬は竜の如し」というが、ここでは馬は多くはないものの、車は本当に流れる水のごとくで、車が停止しない時に十字路を横切ろうとするのは本当に難しい。」ニューヨークからの寄稿した留学生、徐宝謙の「ニューヨーク見聞」『東方雜誌』第18巻第15号（1921年8月10日）より。
- (59) B. Altman & Co. *1920s Fashions from B. Altman & Company*. New York: Dover Publications, Inc., 1999.; Josua Zeitz. *Flapper: A Madcap Story of Sex, Style, Celebrity, and the Women Who Made America Modern*, Three Rivers Press, 2006. 他を参照。
- (60) Joyce K. Schiller, Heather Campbell Coyle, Molly S. Hutton, and Susan Fillin-Yeh *John Sloan's New York*. Delaware Art Museum, 2007: 125.
- (61) 楊蔭楡 1920年2月28日付ミスビグロウ宛て手紙に次のようにある。
「……ニューヨークではたくさんの雪に見舞われています。マサチューセッツでもこんなにたくさんの雪が降っているのでしょうか。ここニューヨークでは、私たちのウィザーホールでもそうですが、たくさんの病人が出て

いますが、私は元気です。貴女と貴女の学校の皆さんが元気であることを祈っています。中国政府派遣の三人の男子学生が、数週間前インフルエンザのためアメリカで亡くなっています。……」

ここで言及されているインフルエンザ（スペイン風邪）は1918年の第一次世界大戦中に兵士の感染によってアメリカ国内にもたらされ、多数の死者をだした。1918年の一年でニューヨークだけでもおよそ一万二千人が死亡している。時の駐米全権公使、顧惟鈞の妻（唐紹儀の娘、唐宝玥。1917年の“The Girl’s essay competition”を主宰）をはじめ、何人かの留学生も亡くなっており、CSMにはその都度哀悼の辞が述べられていた（たとえば“The late Madam Koo”. November 1918）。またこの年の各地の学生支部大会がインフルエンザのために延期されてもいる。たとえば、当時ウェルズレイ支部の秘書の Miss Sze-Tsong Tuan（袁希涛の娘）が、インフルエンザのためにウェルズレイ・カレッジからキャンパス外への外出が厳禁されていることを報告している。（CSM November 1918, “Club News”）また『東方雑誌』第16期第16号（1919年6月）は「去年之流行性感冒症」と題してインフルエンザに関するアメリカの記事を写真とともに載せている。

- (62) 徐志摩については、“Columbia University Catalogue 1921-1922” Annual Commencement June 1, 1921: 30. Conferring of the Degree of Master of Arts, Master of Laws, and Master of Science (Master of Arts Faculties of Political Science, Philosophy and Pure Science) に Chang Hsu Hsu A. B. Clark College 1919 と名が見える。楊蔭榆については前掲カタログ、前掲 Master of Arts の Faculties of Education and Practical Arts (46p.) の箇所に Yin Yu Yang とある。
- (63) 顧永棣『徐志摩伝奇』（学林出版社、2004年）28p.。
- (64) CSM (November 1920) “personal news” に次のように記載されている。
「; K. Y. Liu and C. H. Hsu, Columbia graduates, left for London recently. They are now doing some post-graduate work at the London School of Economics.」論文は英国に発った後から送った可能性もある。尚、徐志摩の論文の題は“The Status of Women in China”で、署名が“CHANG-HSU HAMILTON HSE”である。論文についてはすでに梁錫華『徐志摩新伝』（台湾聯経出版事業公司、1994年）、韓石山『徐志摩伝』（北京十月文芸出版社、2001年）等で言及されている。
- (65) ティーチャーズ・カレッジ資料に以下の記載あり。“College News and Departmental Notes: Secondary Education” by Departmental notes · 1922 Professor Fretwell spoke at the installation of the officers of the Student Association of the William Penn High School for Girls at Philadelphia, March 24, and at Girard College, Philadelphia, April 23. In addition to the students from the United States the following foreign countries are represented in the department this semester: Mexico by Moises Saenz;

Canada by Oliver V. Jewitt; South Africa by Wouter de Vos Malan; India by Baburao Jivanlal Divan and Alfred Zahir; Corea by Franklin Williams and J. Boiling Reynolds; Sweden by C. Stael von Holstein; China by Rufus Huang and Yin Yu Yang.

- (66) コロンビア大学保存資料。
- (67) 徐宝謙「ニューヨーク見聞」(前掲資料)で「東部の大学はエール、ハーバードそしてプリンストンの三つが重鎮であったが最近ではニューヨークのコロンビアも素晴らしい状況となっている」と述べられている。
- (68) 例えばCSM (April 1920) のコロンビア大のClub Newsに‘Ladies Night’の集会在ティーチャーズ・カレッジで三月五日に開催され、女子たちが歌やゲームに興じたことが記されている。コロンビア大学には‘Men’s Faculty Club’とは別に‘The Women’s Graduate Club’‘the women’s Faculty Club’が存在し、女性の権利を求めて活動していた。(Eric C Stome. “Preserving women’s Culture by Creating Feminist Space: The Women’s Graduate and Faculty Clubs of Columbia University, 1895-1929” <http://pocketknowledge.tc.columbia.edu/home.php/viewfile/18304>.
楊蔭楡がこの女性クラブに参加していた可能性はある。また1921年の『東方雑誌』第19巻第18号(民国11年9月25日)でも女権運動の特集を組んでいる。今後陳衡哲を論じる際に検討すべきだが、当時中国男子学生にとってイギリスの伝統の強く残る東部大学では人種の壁は厚く「白人」学生との交流も限られていたのに比して、女子学生間ではアジア人は違った受け止め方をされており、同性間ではより積極的な交流を行っていたようである。
- (69) 徐志摩「留美日記」注(44)参照。
- (70) 平田昌司「目の文学革命・耳の文学革命——1920年代中国における聴覚メディアと「国語」の実験」『中国文学報』第58冊、1999年。
平田昌司「しゃべる女・叱る男——中国の話しことばにみられるジェンダー規制」『興膳教授退官記念中国文学論集』『汲古書院』、2000年。
平田昌司「しゃべるな 危険——17-20世紀中国の女のことは——」『漢字圏の近代——言葉と国家』東京大学出版会、2005年。
- (71) 1907年『中国女報』第一期に発表した「敬告中国二万万女同胞」(『秋瑾全集』中華書局、1960年所収)は、演説の草稿として書かれたという。語尾を重ね型にして、やわらかい口調で呼びかけるような調子が出るように工夫されている。
- (72) 陳は1920年シカゴ大学修士課程を卒業して帰国し、北京大学歴史系教授に着任したが翌年長女出産を機に職を辞し『西洋史』の執筆に専念する。今日でも一定の評価を受けている『西洋史』は『新学制高級中学教科書・西洋史』として商務印書館修より1924年に上巻が、1926年に下巻が刊行された。その後数年間で何度も増刷され、歴史の教科書として大きな影響力を

持った。

- (73) 日本の「良妻賢母」については主に以下を参照。
金森トシエ・藤井治枝『女の教育一〇〇年』三省堂、1977年。小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年。牟田和恵『戦略としての家族——近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、1996年。
- (74) 『東京女子高等師範学校一覧』明治42年度（お茶の水大学女性資料館所蔵）記載の「生徒心得」（130p.）、「生徒姿勢標準」（171p.）、「衛生ニ就テノ心得」（271p.）等。楊蔭楡は1907年より日本留学。東京女子高等師範には1909年に入学し（『東京女子高等師範学校沿革大要 其ノ二』（お茶の水大学女性資料館所蔵）、1913年に「理科聴講」として卒業（『東京女子高等師範学校第六臨時學員養成所一覧』大正二年度（二）、244p.）している。この間、在籍した学校は今のところ不明。（注（4）参照）。楊蔭楡は、『東京女子高等師範学校沿革大要』及び『お茶の水大学百年史』によると、明治42年に定められた「外国人特別入学規定細則」によって入学し、身分は聴講生であるが、実質は正規の学生と同等の扱いだった。またこの『沿革大要』には、時間割が載っており、たとえば、「数学」・「理科」は4年間を通じて週2時間、外国語は3時間だが、「裁縫」は週4時間、「修身」は週2時間、これに4年時に「家事」週2時間が加わった。学科に比べて家政、道徳の占める割合が多い。日本の良妻賢母式の教育と中国の女子近代教育の関係については、すでにいくつかの研究がある。今回は次にあげる資料、著書を参考にした。特に②は、日本の教育界の「支那婦人」「中国人女子留学生」に対する見方、教育観など、女子教育をめぐる日中両国間の関係を知る上で必要な貴重な資料を提供している。
- ①阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版、1990年。
②近代アジア教育史研究会編（阿部洋代表）『近代日本のアジア教育認識・資料編 [中国の部] ——明治後期教育雑誌所収 中国・韓国・台湾関係 記事——第29巻（中国の部21）』龍溪書舎、2002年。
③汪向荣『清国お雇い日本人』朝日出版社、1991年。
④周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会、2000年。
⑤陳姪媛『東アジアの良妻賢母論——創られた伝統』勁草書房、2006年。
尚、日本人女子留学生の動きについては石井洋子「辛亥革命期の留日女子学生」『史論』通号36（東京女子大学史学研究室編／東京女子大学学会史学研究室）pp. 31-154参照。
- (75) イ・ヨンスク『「国語」という思想』（岩波書店、1996年）238p。